

ことばの迷い道

モムサル薬
お願いします

チエ ソ ヒ
諸 昭喜

民博 学術資源研究開発センター

昨年九月中旬ごろ、大切な試験の後、わたしは病気になった。骨のなかまで風が入るように寒く感じられ、家にある布団を全部とり出して、鼻以外の体をすべて覆った。そうしても体がガタガタ震えた。四〇度近くの熱が続き、全身が殴られたように痛かった。高熱にうなされてうわごとを言って、ずっと悪夢をみていた。熱が三八度まで下がると、今度は体に全然力が入らなくなった。歩くこともできず、手を上げる気力すらなかった。わたしはとてもひどい「モムサル(모음)」にかかったのだと思つて病院や薬局を訪ねて回ったが、どこにも「モムサル」にぴたり当てはまる病名や薬は見当たらなかった。日本には「モムサル」がないのか。

韓国におけるモムサルは一般的に風邪の一種として考えられ、寒気がする、体調を崩す、苦痛を感じる、うずうずする、むずむずするなどの症状を引き起こし、それが全身におよぶのが特徴である。モムサルの語源は明らかではないが、「体」を意味する固有語の「모(モム)」と漢字語の「煞(サル)」の組み合わせとみられる。興味深いのは「煞」の部分である。「煞」は中国の文献に由来するとみられ、凶神を指す意味であった。それが高麗時代に朝鮮半島へ伝来すると、巫俗信仰と風水地理論、そして民間において、少しずつ異なる意味で定着した。特に民間では「살이(サリ) 까다(キダ)리(クダ)」、「살(サル) 맞(マッ)다(ダ) (煞に当たる)」という表現でおもに使われてきたが、これは悪鬼にとりつかれたり、邪気がついて運が悪くなることを意味する。急に病気を患ったり、悪いことが起こったりする場合は「急煞(クツ살)에 당(ダ)타(タ)다(ダ)」という表現も使われた。このように「煞」が、仕事を邪魔したり人を傷つけたりする悪い気運を包括的に示して使われるため、全身が痛み、熱が出る症状が民間で「モムサル」とよばれるようになったと推測する。しかし、一九世紀の書簡文で、モムサルがひとつの症状や病名として認識され「ひく、患う、かかる」ものとして示されていることをみると、その当時すでに、煞の「悪霊」という概念からは分離していたものと思われる。

現代のモムサルは、運動会や引越越しなどの過度の身体的労働の後にかかることもあるが、仕事のストレス、試験、または失恋の後にもかかることがある。つまり、モムサルは、精神的にも身体的にも、その人に耐え難いほどの負担、または刺激(ウイルスも含む)が加わり、その結果として発熱、悪寒、筋肉痛などの全身症状があらわれるものだと思う。風邪がウイルスと細菌による感染のイメージが強い一方、モムサルにはさらに、心身の「気」が衰えた状態というイメージがある。そのため、モムサルにかかった人には普通周りは同情してくれるし、病気になった個人の責任も、比較的問われない。もし、あなたが韓国の薬局に行つて「モムサル薬お願いします」と言つたら、薬剤師がかわいそうにという表情で「とても無理なさつたんですね。頑張ってください」と慰めながら、栄養ドリンク剤をただでくれるかもしれない。